

兵士の「遺体」と兵士の「遺靈」

波平恵美子

The Bodies of Soldiers and Memorial Services for Dead Soldiers

序

- ①死後の兵士の身体に対する軍部による支配と統制
- ②戦争手記からみる戦場における兵士の遺体処理と遺骨の収集
- ③家族にとっての兵士の遺体と読み替えの論理

結語 日本人の死の観念と兵士の死

[論文要旨]

人がどのように死に、その遺体がどう扱われ、処理され、その遺骨がどのように、誰によって、管理されるのかは現代の多くの日本人にとっても大きな関心事である。生きている間にも、個人は自分の遺体が死後、誰によってどのように扱われる、その後遺骨の在り所がどうなるかをおおよそ予測している。遺体にもさらには遺骨にも生前のその人のアイデンティティが残存すると考へることの多い日本人においては、死後の「自分の居場所」は自らの社会的アイデンティティの確認に係るゆえに、個人にとってもまた各レベルの集団においても関心が深い。日本人における「死者の存在」の認識は、身体と靈魂の双方に係つていて両者は不可分である。死後死亡した人の身体が充分な儀礼的取扱いを受けてはじめてその靈魂は「死者として充分な資格を持つた死者の靈」となると今なお多くの人々によつて信じられている。従つて死亡した人の身体の取扱いは靈魂の祭祀のあり様と同様に、これまで大きな関心が払はれてきた。

国家によってその身体と生命とを完全に支配される「」になつた近代日本の兵士の遺体の処理のあり様と兵士の靈魂の祀り方とは、兵士が死後もなお国家に所属するのかそれとも家族に所属するのかあるいは「分配」されるのかを国家がどのようにたらえ、また個人や家族や国民一般がそれをどのように受容したのかの認識を示すと考えられる。

死者の存在についての認識は死者の身体と靈魂との関係についての認識でもある。本論では、日本國家が成立して軍隊は発足したその初期より、國家が兵士の死後も、その身体と靈魂の双方を支配・統制下においておくことを志向したことを、特に遺体処理を中心に論じる。